〈嘆き〉の政治学——「舞姫」論

序　作者の高等戦術——「余」の手記の構造

鷗外がドイツ留学を果たして帰国した一八八八（明治二十一）年九月の直後、彼を追って日本にやってきたドイツ女性（エリーゼ）がいた。間もなくこの女性は周囲に説得されて日本を去った。いわゆるエリーゼ事件である。事件は、周囲の人間がその人の将来を考えて意に反する行動を取り、自分もまた〈心ならずも〉その決定に従ってしまったという痛恨の思いを鷗外に抱かせたようだ。日本に帰国した鷗外が西洋仕込みの観念の実行の困難さと自己の無力さを初めて肌身で感じとった事件であった。

エリーゼが日本を去った後、鷗外は次々とこの種の無念な思いや挫折を強いられた。事実、鷗外は、医学界内で孤立し、慣習的な縁談にも応じていかなければならなかった。しかし、赤松門閥との確執、妻登志子との不和が深刻化する中で、鷗外はこれ以上、結果的に他人に振り回されるという無念な〈心ならずも〉の道を歩むことができなくなった。この時、「舞姫」（『国民之友』一八九〇・一）が書かれた。エリーゼが日本を去ってから約一年半後である。

周知の如く、「舞姫」は、鷗外の私小説ではない。「舞姫」の〈作者〉＝「鷗外森林太郎」は、鷗外そのものではない架空の「余」＝太田豊太郎なる人物を設定し、その「余」が過ぎ去ったドイツでの自分とエリスの悲恋を語るという手記風小説に仕立てているからである。しかし、秘密裏に処理させたはずの事件（恋愛）をわざわざ持ち出し、しかもそれを悔恨的に語ってみせる〈語り〉の背後には、エリーゼ事件での〈心ならずも〉の轍を再び踏まないという〈作者〉鷗外の堅い決意（覚悟）が隠されていたはずである。鷗外は、架空の〈太田とエリス〉の悲恋物語を仮構することで周囲の直接的な攻撃から身をかわしつつ周囲を撃つ戦術を用いて、〈心ならずも〉の道をかつて強要し、今もそうしようとしている周囲に抗議の意志を表したのだと考えることができる。[注1]

しかし、「余」に仮託しながら悲恋を悔恨的に語ることで特定の読者に自己の堅い意志を伝達し、そうすることで相手のリアクションをそれとなく引き出そうとする一見女々しくもあるこの巧妙な文学の高等戦術は、一方でまた大変な手記構造上の歪みをはじめから抱えていたとも言える。そもそも、周囲の直接的な攻撃から身をかわす必要から考案された架空の「余」の設定自体、エリーゼと別れて軍（医）官僚として一八九〇年の状況を生きる〈今〉の〈作者〉＝「鷗外森林太郎」の存在の問題を回避、棚上げする手法であったが、「余」とエリスの恋愛（別れ）の場をドイツに定め、その顛末を一八八九年初頭の「セイゴン」で「余」が語るという〈語りの時空〉の設定もまた、〈心ならずも〉エリスを捨てて日本に帰還したはずのその後の「余」の行動自体を手記の世界から外すことで、それへの批評をあらかじめ封じ込める仕掛けであった。「余」の生きている〈現在〉を一応「舞姫」が発表された一八九〇年一月だとすれば、「セイゴン」の地では「余」の未来であった〈天方伯の秘書官となって日本に帰ること〉はすでに実行済みであり、したがって、「舞姫」の語りの時空は、〈天方伯

の秘書官となって日本に帰る〉方針に疑義を唱え、覆すことなど原理的に不可能であり、むしろそのことを自明の前提として成り立っていたのだと言える。封じ込めたというのはこういう意味からであった。ここでは、手記の書き手の「余」が仮にその決定（自明）の世界に対して大いなる後悔や「恨み」を抱いたにせよ、そして、それが周囲の特定の読者に生身の作者鷗外の意志を伝達し、相手のリアクションを引き出す最大の狙いであったにせよ、「余」の言説はこの決定された〈自明の世界〉＝「余」の現在を覆す方向に向かうことはなく、せいぜい、〈今〉「セイゴン」の船の中で嘆き、悲しみ、あるいは必死になってそういう決定に同意してしまった自己の弁解、正当化に努めるほかなかったのである。そういう枠がはじめから嵌められている語りの世界であった。[注2]

1　免罪の装置——「手記」の功利

「余」＝太田は、貧しい狂女（エリス）の「母」に「微なる生計を営むに足る資本を与へ」て日本への帰国の途につき、〈今〉「セイゴン」の船の中にある。この太田は、もしも、狂女の「母」の係累に国家の中枢にかかわっている人がいたとすれば、持ち出し方一つで、たとえ免官中であれおそらく国際的なスキャンダル（紛争）になりかねない事件をドイツで犯し、〈今〉「セイゴン」の地にあった。

太田は単なる日本人の一青年ではなく、国家にその将来を期待され、また約束された少壮のエリート官僚であった。ところが、留学地ドイツでのエリスとの恋愛が契機となって免官の処分を受け、一度、「本国」での「名誉」の道を断たれた男であった。女で道を踏み外した哀れな男、これがこの男に冠せられた屈辱的な風評であった。しかし、この男は、友人相沢謙吉のとりなしによって再び官僚、

「本国」での「名誉」への道につきつつあった。だから、〈今〉「セイゴン」の船の中にあるこの男は、再びめぐってきたチャンスの中で希望、夢、野心に胸膨らませていても不思議ではなかった。しかし、船の中の太田は、そうした切り拓かれつつある未来よりも、ドイツで過ごした五年間の〈留学生活〉＝過去を見詰めていた。「東に還る」〈今〉の太田は、「西に航せし昔の我」ではなくなっていたからである。もはや官費留学した「五年前」の少壮のエリート官僚としての晴れがましさはすっかりなくなっていた。「ニル・アドミラリー」の文学的「気象」＝気分に犯されていたからでも、「浮き世のうきふし」「人の心の頼みがた」さ、わが心の「変り易」さを認識したからでも、また、天方伯の「随行員」（初出「舞姫」）の一人として「外交のいとぐち乱れ」（同）た多難な「国事」（同）に心を痛めたり、あるいは自己の「行末」（同）に一抹の不安を覚えていたからでもなく、それらとは異質な「人知らぬ恨」を抱えていたからである。なるほど、この「恨み」は、「心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみな」ってはいたが、「文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きの如く、限なき懐旧の情を喚び起し」、ドイツを離れてすでに一月ほど経過したこの「セイゴン」の時点においても太田の心を呪縛していた。航海中に「日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のまゝ」になっているのもこの〈恨み〉の深さゆえであった。

ところで、日本への出港がいよいよ間近に迫った夜、太田は、この〈恨み〉から解放されるべく「熾熱燈」の消えるまでの限られた時間の中で、「白紙のまゝ」の冊子に手記を書きはじめる。神にわが心の悩みを告白することで救われる文化と無縁に生きる太田にとって〈書く〉ことが救いであった。神の力も仏の力も及ばぬ「セイゴンの港」において太田はすでにやってしまった〈「恨み」としての過去〉を対象化しはじめたのであった。

拓かれた未来に向かって生きんとする自分と罪を犯して過去に脅迫されている自分、エリスを裏切って「東に還る」行為をすでに選択してしまった自分と「免すべからぬ罪人」という罪意識を抱え込んでいる自分、〈今〉ここ「セイゴン」の船の中にある太田は、この二つの〈自分〉に引き裂かれ、いわば宙づりにされていた。太田は、この宙づり状態を解除し、「東に還」るべく手記を書き始めたのであった。自己の心のこだわり＝「人知らぬ恨」を果敢に「鎖」（消）するという手記の戦略は明らかであった。

一体、書き手となった「余」は、〈「恨」としての過去〉をどう語ることで、この宙づり状態を解除していったのであろうか。「舞姫」ではこの「余」の宙づり解除プロセスが一つのドラマだったとも言えよう。そして、今、結論的に言えば、犯した過ちの原因を探究する「余」は、エリスとの別れは本意ではなかったこと、しかし、その本意でないことに結果として応じてしまったのは、一つは行為の結果をよく計算することの出来ない粗忽さと他人に本意を素直に打ち明けることのできない「弱くふびんなる心」であり、もう一つは善意から汚れ役を積極的に引き受けてくれた友人相沢謙吉の深情けであったと総括したのであった。「余」は、犯した過ちの倫理的責任の一半を自己の性格的弱性に求めて嘆くと共に、他の一半を友人に背負わせ、「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり」という他人批判めいた一文で手記を閉じてしまったのである。「余」の手記は、己の弱性なり、友人の深情けを思い切り嘆き、恨むことで、〈心ならずも〉エリスを捨てて「東に還」る心の蟠り＝宙づり状態を解除し、「帰東の途」についたのであった。

たしかに、「舞姫」は、身ごもらせた外国の女を自分の保身から裏切り、発狂させておきながら、

捨てて日本に帰って来た男のそれ自体正直な〈悶え〉を描いている。しかし、その悶えも「俺の性格的弱さがなあ……」「あの時、あいつがああしなければなあ……」というのではいささか甘いのではないかと思うのも自然であろう。「嘆けばいいって……」といいたくもなろうか。ついでに言えば、この男の〈悶え〉は出世、国家、政治のために女を裏切り、愛を捨てたせいだとも語られている。つまり、ここでは、才子の〈出世〉が佳人の〈愛〉を駆逐する物語のモードで仕立てられているわけだ。しかし、この男は恋などおかまいなしにただ通俗的な出世＝命にのみ一貫して生きたぎんぎんマンであったわけではない。二人の関係は、太田とエリスの救い——救われる関係がまずあって、それが免官を契機に男と女として愛し合う関係に入り、さらにエリスの妊娠を契機に逃れようのない夫と妻の関係へと発展していったのであり、この最後の関係に入る直前で壁に突き当たったのであった。それまでの二人の関係は比較的平穏そのものであった。ところが、夫という今までとは比較にならぬ責任を背負わされる可能性が生じた時、うろたえはじめ、エリスとの〈愛〉をとるか「本国」＝〈出世〉をとるかの二者択一の状況を抱え込んだのであった。ここにいたって一国内でしか流通、充足するほかない自閉的な価値（幸福）意識の太田はエリスとの愛の状況を発展させることができず、結果的に〈出世〉あるいは〈政治〉を選択するようになったのであった。だから、ここではすっかり原因と結果が転倒されているのだ。理由は明らかである。語り手「余」の内に才子佳人小説の手法（太田＝エリート官僚＝才子、エリス＝佳人）と、勧善懲悪の一変種としての出世＝悪、愛＝善という〈出世と愛〉の二項対立的観念があらかじめ用意されていたからであった。そのため、「余」は、〈「恨み」としての過去〉を語りはじめた時、この手法なり観念に搦め取られ、結果的に、太田＝出世＝悪、エリス＝愛＝善という〈出世と愛〉の物語を仕立てたのであった。

しかし、繰り返せば、太田ははじめから弱性の男でもなかったし、いつでも〈出世〉のことばかりを優先的に考えているあこぎな男でもなかった。ところが、語り手の「余」は、〈出世と愛〉のドラマへと仕立てることで、太田を出世のために愛＝善を捨てた男として矮小化するとともにエリスを限りなく聖化し、太田の倫理的な罪のみを問題にして嘆いてみせたのであった。しかし、すでに述べたように、本当の太田の〈罪〉は、出世、国家、政治を選択したというところにあったわけではなかった。愛する女を妊娠させておきながら、しかも女が正式な結婚を望んでいるのを知りながら、それに正面から対応することができなかったという日本人男性の一国主義的な自閉的〈幸福観〉こそ問題の核心であった。[注3] しかし、「余」の手記は、エリスへの裏切りによって晒されたこの日本人男性たる「余」の価値（幸福）意識の狭さ、苦悩を冷静に批評する方向へと向かうことはなく、むしろそれを嘆きの美学で隠蔽さえしてしまった。むろん、愛の裏切りによって生じた現在進行している自己の帰国の行為の悪＝罪性も言及されてもいない。すべては、犯した罪を〈嘆く〉ことで免罪化されてしまったのであった。しかし、このようなことはすべて、〈作者〉の語りの戦略＝〈「余」の手記の構造〉からくる必然の結果でもあった。

さて、ここで、読み手に何が要請されているか語るまでもあるまい。語り手「余」の語りの歪みを相対化しつつ作品の内部に入っていくことである。

2　自我の組み替え——青年期の〈不安と反抗〉

太田豊太郎は、ドイツに向かう以前、ほとんど「学問」一筋に生きて来た男であった。この男は、

「旧藩の学館」から「予備嚢」を経て東京「大学法学部」に入り、十九歳で卒業するが、いつも「一級の首」の成績を残し、さしたる挫折をほとんど経験したこともなかった。大学を卒業して「某省に出仕」するが、そこでも「官長の覚え殊」の外よく、いわば将来を嘱望された若きエリート官僚であった。

ところで、母を田舎から呼び寄せ、「楽しき年を送」ったという「某省」での三年間は、自由民権運動が最も高揚する時期にあたっている。太田は自由民権運動を弾圧する明治政府の内側にいたことになる。しかし、この男は、政治に特別関心があったわけではない。もともと人（母、官長）の敗いた路線をただ忠実に実行して生きる「所動的、器械的の人物」であったからである。「一課の事務を取り調べよ」という某省の命を受けたのもその忠実な勤勉さや抜群の言語能力が買われたからであった。たしかに太田には「今の世に雄飛すべき政治家になる」という夢がなかったわけではない。しかし、それは「穉き心に思」ったという程度のもので、基本的には母の敗いた路線を疑うことなく生きて来た勤勉な実務型の青年であり、外部の血生臭い権力闘争とは無縁の世界に生きていたのであった。自由民権の激化事件が多発する時期、この男は、「官命」をうけてドイツに渡った。

明治の立身出世というプロパガンダは、人々を一度、藩、身分の制度から解体し、平等なる競争原理のもとにおいたのだと考えることができるかもしれない。しかし、人々は、余りにも早く国家の用意した立身出世の価値システムのもとに吸収されていくことになった。特に、武士としての身分的特権を剝奪された人々は、その特権的な身分意識を立身出世による上昇性のうちに確保しようとした。武士としての名誉意識、武家の継続、再興というテーマは新しい立身出世的秩序の中で蘇生したのである。

太田は、官長から洋行の「命を受け」た時、「我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ち」「五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遥々と家を離れてベルリンの都」に向かう決意をした。しかし、このドイツに勇躍した太田の「我」は、武士身分意識を抱えた国家、家、自己が垂直に無媒介に癒着、一体化している、いわば共同体内自他未分意識を基底にした立身出世主義によって構成されていた。もちろん、太田は、某省の役割が近代国家の法制の整備・研究にあることをよく心得ていた。ドイツでの留学中、太田は、その限定された〈職域〉＝任務に忠実な青年官僚として「官事」のほか心は動かさないという、まさに「あだなる美観に心をば動さじの誓」をたててかたくなな禁欲的な姿勢で臨み、「三年ばかりは夢の如く」生きた。そこに、東洋からきた自信満々の一官僚としての太田の主体性がかけられていた。後に、語り手の「余」は、自分に「勇気」があったわけではなく、「外物に恐れて自らわが手足を縛せし」だけだと卑下し、「合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす」る「処女に似た」心、「弱くふびんなる心」こそ「我本性」と自意識薄く語ることになるのだが、実際は逆で、自信過剰とも思えるところが太田には随所に見られるのだ。「いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき」という語学力自慢もその一つであった。

しかし、考えてみれば、この太田なる人物は、母子一体化の世界の中で生きて来た人間であった。大学を卒業し、ドイツに留学した時も、この自我の構造は基本的に変ることはなく、母子ならぬ官長との一体化の中で生きていた。この青年は、母に褒められること、官長に評価されることのみにこころを配り、切磋琢磨して生きてきた。自己の欲望を消して相手の期待の水準にあわせることを喜び（自己実現）としてきたのであった。この自己の欲望を抑圧して相手の期待の水準にあわせるという

他者への無媒介な一体化（同化）こそ太田の「我名を成」すことが「我家を興」すことでもある「名誉」「栄達」の立身出世の〈道〉であり、太田という男の自我の型であった。

ところが、太田は、ドイツでの「三年」という時間の経過の中で、こうした自己喪失が自己実現であるような他者への無媒介な一体化（同化）の自我の在り方に懐疑の目をもち始める。ヨーロッパの文化、精神の溢れる「自由なる大学の風に当」ることで太田は「まことの我」という観念を獲得したからであった。そして、この観念によって今までの「我」を内省した時、過去の自分が他の視線にそった「所動的、機械的の人物」でしかなかったこと、また、自分は言語能力を生かした外交官ならいざしらず「政治家」にも「法律家」にもむかない人間ではないかと思いはじめたのであった。

しかし、こうした「まことの我」の〈発見〉を、太田が近代的な自我、すなわちいかなるものの庇護を受けることもなくなお自立できる単独的な個人の意識を獲得した、あるいは覚醒したというように過大に評価すべきではない。太田は、ドイツに来て、はじめて母、官長と一体化した子供の自我から大人の自我への自我構造の組み替えという青年期固有の自我構造の危機に直面したのだと解すべきであろう。本当の自分とは何か、どう自分は生きるべきかという〈自我〉＝〈進路〉の壁にぶつかっていたのだ。そして、太田のドイツでの青春（自我）の彷徨、青年期特有の反抗と不安の人生のはじまり――その現れが、「法制の細目」にこだわる官長に対して、「法の精神」の獲得こそ大切であるという反抗であり、「大学にては法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ」る行動であり、あるいは、華やかな白と光りのあやなす都会の中心部ではなく、どこか崩れた落ちぶれた暗い都市の周辺部への心理的親近感ともなり、そのヨーロッパのうらぶれた路地の空間にたたずむことで心の平穏、安定を取り戻そうとする行動であった。実は、この延長線で太田とエリスとの運命的な出会いがセッ

トされたのだ。太田は、偶然、その空間で知り合った不幸で貧しいドイツの一少女に「憐憫の情」を抱く。警戒心をなくしてエリスに接近する太田の行動は唐突の感じを与えるが、崩れた落ちぶれた都市の周辺部、うらぶれた路地の空間への心理的親近感が太田に生まれている以上、ある意味で当然の成り行きであった。[注4] さらに、それは「まことの我」という幻想に取り憑かれて母との距離をとりはじめた太田の一つの反抗の姿でもあった。

「歴史文学」と路地こそ太田が「漸く蔗を嚼む境に入りぬ」空間であった。日本で自由民権の政治の季節を素通りしたこの男は、ドイツで「自由」「独立」の観念と遭遇することで「まことの我」なる観念を獲得し、「母」「官長」、あるいは〈組織〉から自立した〈本当の自分探し〉に向かっていた。しかし、この太田の〈本当の自分探し〉は、「母」「官長」と癒着した自分を引き離すことであるから当然その逸脱に伴う試練が待ち受けていた。もともと、自信に溢れて公務に没頭する太田の生活ぶりは留学生仲間の妬みをかっていたが、今、「まことの我」の観念を獲得することで留学生仲間と異質の領域を生きる太田は〈いじめ〉の対象となり、事実、不行跡を官長に「讒誣」され、官長はまた、自己の路線、指示にクレームをつける太田を事情を調査することもなく免官の処置を取り、組織から排除した。もちろん、この処分は、「冤罪」に等しいものであった。しかし、これは、国家＝家に内属することでありえた「所動的、機械的の人物」の「我」から離陸した限りで「まことの我」の観念に導かれた〈本当の自分探し〉の行動が必然的に背負わなければならない試練であった。

3　免官後の太田――ヨーロッパの〈知〉の獲得へ

「まことの我」という観念を所有した太田に対して「官長」＝国家は免官というかたちで「本国」での「名誉」「栄達」＝立身出世の〈道〉を閉ざした。それは、いつも「一級の首」を走っていた若きエリート官僚であった太田の初めての挫折の経験であった。ちょうどこの時、太田は、「一は母の自筆、一は親戚なる某が、母の死」を報じた書状を手にしている。「我がまたなく慕ふ母」の自筆には、首尾よく公務を終えて帰国する孝行息子を待ち望む年老いた母の心情が述べられていたにちがいない。それだけに、母の死は解放よりもおめおめと帰国できない太田の心的状況をつくりだしたはずである。「このまゝにて郷にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身」となり、家名を汚すことになるからであった。「母」の手紙と死は太田をしてドイツに滞留させる大きな理由となった。[85]

それにしても、免官と「母」の死にあったこの瞬間の太田は、国家から弾かれたばかりか家（母）の庇護からも投げ出されていて、いわばはじめて単独的に世界と向かいあわされていた。しかし、この孤独を抱えた〈流離人〉は、幸運というべきか不運というべきかすぐさま天方大臣の「秘書官」である友人相沢謙吉から「通信員」の仕事を世話され、また、エリスには住まいを提供されることで「危急存亡」をしのぐことになる。太田は、女に溺れた男という最大の屈辱的な汚名を受けて日本に帰るに帰れない状況を抱えていたが、友人と恋人の二人の庇護によって演出された友情と恋の空間をセットされることで、国家（「官長」）、家（母）によって演出された立身出世の空間から投げ出されながら、するりとそこへ転移することでしばらく生きることができたのであった。しかし、太田はやがてこの二人の「恩人」の新たな段階の〈友情〉と〈愛〉の展開によってこの「楽しい」空間から引き裂かれていくのである。

太田は、青年期特有の反抗と不安の中でドイツ少女エリスと出会い、「始めて相見し時」から「愛

する情」をもっていた。しかし、それは「憐憫の情」から発したものでまだ男女の関係というものではなかった。太田は「充分なる教育を受け」なかったエリスに高尚な文学を読ませ、「言葉の訛」を正したり語学を教えるといった「痴駿なる歓楽」「師弟の交り」に近い関係を保っていた。ところが、太田の免官を知るやエリスは、太田の身の不幸をいたく悲しみ、同情し、母に嘘をついても太田の危急を救おうとし、居場所を与えることで支えようとした。もちろん、その支えは、エリスの母に嘘がばれたらすぐ壊れかねないほど危うく、脆弱なものであった。しかし、そこにエリスの愛の証を見て、太田は一挙に「愛づる心」から男女の関係へと踏み込んでいった。免官は太田とエリスとの関係を一挙に〈男〉と〈女〉の関係に移行させたのであった。太田はエリスの家に「寄寓」し、同棲生活をはじめる。

しかし、この同棲生活は、緊急避難的要素が強く、太田自身浮かれてばかりおれない空間であった。実際、「本国」での立身出世の〈道〉を喪失した太田にとって、どうこれからこのドイツで新しい自己の未来を構築するのかという当面の課題に直面していたはずであった。また、職業的自立と共に、男と女の関係にはいったその後の見通しも避けて通ることのできない問題として提起されていた。しかし、太田は、己れの脆弱な「通信員」としての生活基盤を補強しようとした形跡はないし、エリスとの間に成立するだろう新しい関係――〈家〉の問題――について何の心の準備もしていない。エリスとの愛の一つの必然としてエリスが妊娠でもすれば、太田に逃げることのできない責任が生じてくるはずであり、曖昧な関係を持続するわけにはいかないだろう。それは外人妻を感性が容認するかどうかを含めて太田のこれまでの「我」――国内的に封じ込まれた価値（幸福）意識、アイデンティティ――を根本的に組み直し、観念としての「まことの我」の実質を構築しなければならないはずであ

った。課題は山積していた。しかし、太田は二人によって演出された空間にほとんど自足し、時に、場末の「休息所」で「冷むる」コーヒー啜りつつ店の新聞紙から情報を得ている「日本人」である自分と「掌上の舞をもなしえつべき少女」エリスとの物珍しいカップルを意識することはあっても新婚然として過ごし、「憂きがなかにも楽しき月日」を享受していた。

一体、相沢の世話してくれたドイツの「政治、学芸の事などを報道」する「通信員」の仕事は、よく物を〝書く〟人たる太田の得意とする分野であった。太田は「我学問は荒みぬ」と嘆きつつも喜喜として「通信員」の仕事に没頭していた。この「月日」は、太田がヨーロッパ近代の精神、情報を日本の誰にも負けないほど習得する、いわば啓蒙知識人としての実質を獲得する一年間であった。「官長」に「法の精神」をもって異議を唱えた「余」をさらに磨いたといってもよい。狭い事務的官僚ではなく、広い知識、教養を身につけた啓蒙知識人的な幅の広がりこそ、免官から帰国までのドイツの一年有半の「通信員」生活の中でつかんだ太田豊太郎の実質であった。皮肉にも友情と愛に支えられた〈空間〉の日々は、太田が「まことの我」の観念に導かれてヨーロッパの〈知〉を思う存分吸収する時間でしかなかった。

太田のエリート意識は一時的に蹉跌の憂き目に会うが、最終的に崩されることはなかった。太田は免官にあったが、それは能力がないと判断されたためではなく、誤解にもとづく密告によるものであった。太田は免官前も〈知〉の優位性を保っていたが、免官後も、狭いアカデミズムの学問はすたれたとしても、「知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ」としてその〈知〉の優位性はいささかも揺らぐことはなかった。後に天方伯＝〈もう一つの国家〉から「われと共に東にかへる心なきか」と誘われるが、それは「賓主の間に周旋して事を辨ず

る」外交交渉過程での太田の秀抜な言語能力、手腕が評価されただけでなく、天方伯が大日本帝国憲法発布直前の「故郷にてありしことなどを挙げて余の意見を問」うほど広い啓蒙的な知識を太田が有していたからであった。いわば太田は天方伯の描くこれからの国家像の中での有用な人材として認定されたのだ。ドイツ滞在中、有能な官僚というレベルでの太田の自信はいささかも壊れることはなかった。(注6)

4　明治二十一年の冬――エリス妊娠の波紋

一八八八（明治二十一）年の冬、「憂き」よりも「楽しき」に重点があった太田の「憂きがなかにも楽しき月日」は終焉し、「心は楽しからず」の「憂き」のみの状況を迎える。それはちょうど、エリスが「悪阻」（妊娠）の症状を表す時期とぴったり重なっていた。エリスの妊娠を契機に、同棲という二人の曖昧な愛の関係の清算が迫られ、それぞれ異質な状況を抱えはじめる。エリスは、妊娠を起点にして新しい〈家〉の幻想――エリスとその母には貧しさからの脱出という暗黙の了解があった――をもち始め、太田は逆に、定職のない「覚束なき」「我身の行末」を「いかにせまし」という不安に脅えることになる。(注7)

一般に、堕胎・中絶が道徳的にはもちろん法的にも技術的にも不可能である時、女の妊娠は今日では考えられぬ無責任な逃げを許さぬ絶対的な拘束力（現実）となって男の前に立ち現れてくる。とりわけ、同棲中の男女にとって妊娠は曖昧な愛の関係の清算、解除を促すものとして機能してくることになる。太田とエリスの場合、まずエリスは妊娠を契機にいち早く「襁褓」製作に励み、やがて「正

しき心にて、よもあだし名をばなのらせ玉はじ」という正式な結婚を迫る形で妊娠以後の状況を生きることになる。妊娠した女のごく自然な振る舞いだと言えよう。しかし、太田の場合は全く逆で、エリスが逃げることを許さぬ新しい〈家〉のシフトを敷けば敷くほど、自己の「行末」の不安は、新しい〈家〉から逃げられない自分――この地に縛られる自分――「この広漠たる欧州大都の人の海に葬られん」とする異国で埋没する自分というように「埋没」の〈不安と恐怖〉に駆り立てられることになる。太田はエリス妊娠以後、〈心身喪失〉に近い狼狽ぶりを対人関係において示すことになるが、その心因は、遠くこの〈新しい家＝異国への「埋没」〉の恐怖感に根差している。

しかし、どうしてエリスの妊娠――正式な結婚の道が太田にとって自滅、「埋没」という恐怖の道なのか。実際、エリスの指し示す道の中にこそ「まことの我」による〈本当の自分〉が確定されるのではないか。しかし、この時の太田にはエリスの妊娠がエリスと共に生きられるという〈喜び〉とはならなかった。そもそもエリスの妊娠の可能性さえまともに考えたこともない太田にとって妊娠は青天の霹靂であり、自分の「行末」を暗くする以外の何物でもなかった。一体、妊娠は男と女が各自どこに自分の夢、希望、幸福、生きがいを定めているかを瞬時に照らし出すリトマス紙のようなものだ。エリスの夢、希望、幸福、生きがいがどこにあったか語るまでもないが、太田のそれは全く異なるところにあったということである。エリート官僚太田にとってエリスと過ごした同棲の日々は、帰国したくとも帰国できない〈迂路〉の時間でしかなかった。己の負いたる屈辱的な「汚名」を何らかの形で晴らし、堂々と帰還するための〈猶予〉の時間であった。「汚名」を何らかの形で晴らして帰還することこそ実は太田の第一義の夢、希望、幸福、生きがいであった。太田がエリスの妊娠を自己の滅び、「埋没」の恐怖として受け止めたのは当然であった。エリス妊娠は、太田の心の所在が本当のところどこにあったかを最も鮮やかに照らしだしてしまったのだ。

「明治廿一年の冬は来にけり。」

エリスの妊娠によって自滅、「埋没」か日本への帰還かで揺れはじめた太田豊太郎の前に、日本から二人の男が「本国」＝国家を背負ってベルリンにやってくる「年」である。しかし、より本質的には、古き「我」から自立せんとした太田の「まことの我」が、エリスとの〈家〉の構築の中にその着地点をみつけるのではなく、帰国を拒否した「郷」「本国」＝国家と再び新しい関係を取ることで軟着陸を開始しようとした〈転向〉の「年」であった。

エリスがつわりで寝込んでいる日曜日、太田の運命を左右する一通の書状が届いた。友人相沢が天方大臣に随行してベルリンにやってきたこと、大臣が会いたいと言っていること、「汝が名誉を恢復するも此時にあるべきぞ」という内容であった。ここでの友人相沢の狙いはあきらかであろう。太田を大臣に会わせ、仕事をさせ、その有能ぶりをもって再び官僚の道へとつかせることである。

ところで、エリスは相沢の天方大臣に会わせるという計らいを一方で喜びながらも、早くも「縦令富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宣ふ如くならずも。」と念をおしている。太田はエリスの危惧を軽く「微笑」して取り合わないが、事態は、エリスが直感した「見棄て」る方向で動いて行く。

相沢は、「学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき」かと問い、「意を決して断てと」太田に忠告した。日本の国家の内側で自己の「学識」「才

能」を発揮することが〈男〉の「目的」＝〈意味〉ある生活だと考えている相沢からすれば、太田の今の生活は、「一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活」をするものとして見えていた。相沢は、「まことの我」に目覚めた結果として太田の〈現在〉があることを知らず、また、エリスの愛も「人材を知りてのこひにあらず」して「慣習といふ一種の惰性より生じた交」わり程度の認識であった。その限りで言えば、相沢は、太田の何もわかっていなかったと言える。ただ、〈新しい家＝異国への「埋没」〉の恐怖感に翻弄された太田は、相沢の示した「方鍼」に蟠りながらも従い、エリスとの「情縁を断たんと約」束してしまう。

たしかに、太田はこの段階でも、「棄て難きはエリスが愛」といい、「今の生活」にこだわっている。相沢の示した「方鍼」が絶対的だと確信して従ったわけでもない。しかし、そういう自己の本心を隠し、また、エリスの妊娠という重大な事柄を一言も相沢に話すこともなく約束してしまった背後には、大田の埋没の恐怖が強く働いていたのであった。かつて太田の性向には、他者の期待の水準に自己を合わせてしまうところがあった。[18] しかし、ここでの太田の同化は、語り手「余」の言う「友に対して否とはえ対へぬ」心の弱さからそうしたというわけではなく、相沢が埋没の不安、恐怖から救済してくれる相手たりえたからこそそうしたのだと考えたい。これは、天方大臣に対する太田の対応の場合も同様であった。もちろん、最初から相沢や天方大臣に「未来の望みを繋ぐ」明瞭な計算が太田にあったわけではない。その点ではエリスやその母の方がずっとシビアであった。ただ、太田が相沢や天方大臣の悪魔のささやきに応じたのは、応じる太田の側の心の迷い、空白、隙間、すなわち〈「埋没」の恐怖感〉があったからで、太田にそんなものが微塵もなければ妊娠の件を隠す必要もなく、そもそも過剰なエリスの引き留め策などなかったはずである。

相沢は太田の転向を唆した立役者ではない。太田の内部に転向に応じるものがすでに準備されていて、相沢はそれを完成させるために転向プログラムを携えてドイツにやってきたのである。そして、ここで確認しておきたいのは、太田が、「芝居に出入して、女優と交」わったために「官を免じ」「職を解」かれた官僚というレッテルを貼られた男であったということである。太田を官僚に復帰させるためには、レッテルにまつわる一切の不利な情報をすべてなかったものとして消去しておくことが絶対条件であった。この点をクリヤーしなければ、一度、免職された男の復帰はいかに有能であろうとも難しいというのが常識であろう。天方大臣もこの太田にはられたレッテルには無関心ではなかった。こうして、太田は友人相沢の忠告に従い、エリスとの決別を約束、また、天方伯の帰国への薦めにも応じていく。そしてついには、エリスをして「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と呪いの言葉を吐かせ、発狂へと追い込んだのであった。

5　国家の〈外〉に出られぬ日本人男性の悲劇

エリスは、ヨーロッパ文化の恩恵に浴した女ではなく、むしろそこから弾かれた女であった。しかし、エリスとその母は、逆境にある日本人太田との偶然の関係を通してドイツ市民社会への復帰の幻想を持ちはじめた。とりわけ、太田の免官後に生じた関係の深まりは父＝「エルンスト・ワイゲルト」をなくして屈辱的な人生を強いられたエリスをしてそこからの脱出願望をより強めていった。妊娠はそうした幻想、願望の一つの現実化の表れであり、エリスが新しい〈家〉の問題に真剣になるのは当然であった。その真剣さは産む決意だけでなく、「母とはいたく争」い、母をドイツに残して、

一緒に日本へ帰ってもよいとまで決意させていた。そこに、「一輪の名花」としての「少女」ではなく、通俗的なエリス＝娼婦説を超えた、まさに新しい〈家〉を構築しようという明瞭な主体性をもった〈女〉としてのエリスがいる。エリスは太田をドイツに「愛もて繋ぎ留め」ようとしたわけではなく、また、「君が世に出で玉はん日」＝〈出世〉を邪魔しようとしたわけでもない。太田が「世に出」るために「東に還り玉はん」ことも了解の内にあったのだ。エリスは太田の愛の実行＝〈家〉を熱望する女としてありつづけていただけであった。

一方、太田は、「襁褓」を記号化して迫って来るエリスの新しい〈家〉の承認については自己のコメントを回避し、「頭を垂れ」るだけで一貫して曖昧な態度を取り続けた。裏でエリス切り捨ての裏切り行動をすでに実行している以上、曖昧になるのは当然であるが、しかし、太田の犯罪性は、その裏切りを「特操なき心」と自覚しながら、その事実、あるいはそれにいたる悩みをエリスに語ることなく、むしろ、エリスに幻想を持たせ続けるかのような行為（「抱き」しめる）をしているというその分裂的な破廉恥さにこそあろう。そして、太田は、ついに「免すべからぬ罪人」と自覚した後も人事不省に陥ることで〈裏切り〉の事実を告白することはなかった。まことに、「かくまでに」エリスを「欺き」通したのである。エリスを発狂にいたらしめたのは、この太田の「欺き」の深さであった。新しい〈家〉――ここにエリスのアイデンティティのすべてがかけられていた。しかし、それがまさしく一つの幻想でしかなかったことを知った時、その幻想と一体であったエリスの精神の働きもまた崩壊したのであった。

太田は、別に法律的に規制されていたわけではないが、エリス＝外人妻との新しい〈家〉――国家、家の枠を越えた〈家〉――に自分なりの夢、幸福、希望、生きがいのイメージを重ねることができな

かった。指摘してきたように全く別のところにあったからである。太田が直面していたのは、国家の枠の外で生きることの困難性であった。現象的には、「故郷を憶ふ念と栄達を求むる心」とエリスの「愛」に引き裂かれて何の態度決定を下せぬまま人事不省に陥っていくのが太田という男の姿であるが、しかし、そこにさらされていたのは、一国主義的な上昇＝価値、幸福、生きがいのアイデンティティの中でしか生きられぬ日本人の惨めさであった。太田はそういうふうにしか生きられない日本人の惨めさ、それ故の苦悩をエリスに語ろうとはしなかった。それが結果的によりひどい悲劇を生み出していったわけだが、太田は犯している罪よりもそういうふうにしか生きられぬ自己を〈恥〉として意識しており、それを公開することは余りにも恥辱にすぎたのであった。こうして、エリスは、新しい愛の事態を前にしての日本人男性の醜態、国家の枠に搦め捕られた価値（幸福）意識の偏狭さとそれ故の苦しみが全く見えなかったし、太田はまた、エリスが発狂することで永久に謝罪の機会を失ったのであった。ちょうど「こゝろ」の「先生」＝「私」がKの自殺によって永久に謝罪の機会を失ったようにである。

太田は、恥＝コンプレックスと裏切りの罪意識を抱え込んだまま日本へと帰還せざるをえなかった。語り手「余」が指摘しているように、ドイツで獲得した「まことの我」なる観念は「足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りし」ただの観念でしかなかった。おそらく、鷗外がエリーゼ事件で味わった恥辱もまたこのようなものであったのだろう。それは、一国主義的な上昇＝価値、幸福、生きがいのアイデンティティ、枠の中で自分もまた深く「縛」されているという悲しい痛切な自覚であった。実はこの時、そういう空間で生きざるをえない自己、および日本が真実〈発見〉されたのであった。太田における〈本当の自分探し〉は、「まことの我」なる観念によって一度、

「母」「官長」から切り放した自己が、改めて「母」「官長」のむこうにある日本、国家と再合流することであった。そして、その過程で太田に生じていたドラマと言えば、西洋＝優、日本＝劣の図式の内面化であった。

これが、自由民権で揺れ、そして大日本帝国憲法が発布されるという日本の激動の五年間を〈空白〉にしてドイツで生きた太田の主体の全容であった。この男が啓蒙知識人的〈官僚〉として帰国し、形式主義的な近代化を推進する「官長」グループに対してその啓蒙知識人的〈知〉を発揮していくだろうことは容易に想像することができる。実際、天方大臣、あるいはそのグループは、この日本、及び日本人の限界をとことん知り抜いた男の屈折をこそ有用として許容したのであった。ただ、この啓蒙知識人的な新官僚がどのような戦いをするにせよ、〈立身出世〉という一国主義的な上昇＝価値、幸福、生きがいのアイデンティティ、枠内での自分を選択した以上、その戦いは、その枠内での改革にとどまるだろうということもまた自明であった。

しかし、それにしても、「舞姫」の最大の事件とは、語り手「余」が、ドイツでの太田豊太郎の物語――〈立身出世〉という一国主義的な上昇＝価値、幸福、生きがいとする自我構造に呪縛されて国家の〈外〉に出られなかった男の物語――を太田＝出世＝悪、エリス＝愛＝善の二項対立的観念、構図の生成によって嘆きの美学へと回収し、結果的にその敗北の本質的意味を隠蔽してしまったという点にこそあろう。たしかに、「余」はそうすることによって官僚としてリバイバルする自己の行為と存在をぎりぎりのところで是認したのであり、この是認は〈作者〉の覚悟の選択でもあった。しかし、いずにしても、それは、本書「I」で述べたように、近代日本人の自我の問題をその本質的なところで考察する機会を奪ってしまったということであった。いわば、日本の近代文学はその出発点において、最も日本人にとって根本的な自我のテーマを切り捨てる方向を選択したのであった。そしてさらに、ここで生成した出世と恋愛の二項対立観念は、たとえそれが立身出世の社会秩序に生きる通過儀礼＝〈清め〉の儀式であったとしても、やがて政治と文学という巨大な二項対立観念へと発展し、結局、出世あるいは政治を悪として分析・批評の対象から免除し、その実、日本人の近代の主題――一国内に自閉する立身出世的自我とその感性の変革――から限りなく遁走するという不幸な道筋をつけてしまったのであった。

森鷗外の生地津和野には石見の国の人として生きた彼＝「森林太郎」の墓がある。そこには結局、近代的自我などとは無縁に生きてしまった「余」＝自己への痛切な自己認識（反省）が刻印されている。

注1　山田有策は、これまでの「舞姫」論を整理した「舞姫」（『国文学』98・1　学燈社）の中で、譬えどんなに作品論的に自立したとしても「舞姫」の「自伝性」は「根が深」く、そこへの留意を促している。

注2　この点については早く三好行雄の「過去の時間を変えることは不可能であるとの自明の理が、小説の構造を決定している」（「舞姫」・その前後」三好行雄著作集第二巻『森鷗外・夏目漱石』93・4　筑摩書房）との指摘があり、最近では松沢和宏が、「忘却のメモワール――『舞姫』の生成論的読解の試み――」（『文学』第八巻第三号97・夏、岩波書店）の中で、「舞姫」にはもともと「過去の精神的外傷の生々しい直接性を回避し」「過去を回想する物語」の中に「溶解」させるという「防衛機制としてのメモワール（記憶＝回想的手記）の戦略」があったと緻密な分析をしている。

注3　これまで、「舞姫」は、近代的自我の覚醒と挫折、あるいは「愛をも裏切って、国家との関係に生きざるをえない明治知識人の宿命」（三好行雄、前出）の物語、あるいは「炸裂する「世界都市」にまぎれこんだ異国の青年

のものがたり」（前田愛『都市空間の文学』82・12　筑摩書房）として読まれたり、さらには太田豊太郎とエリスをそれぞれの属する文化に着目することで、「東西の異なる文化の男女の愛（自我）の相克が描かれた作品」（田中実「多層的意識構造のなかの〈劇作者〉――森鷗外『舞姫』」『小説の力』96・2　大修館書店）として読まれてきた。しかし、こうした〈読み〉はいささか好意的すぎる読みではないかと私には思われる。

注4　前田愛の「BERLIN　1888」（前出書所収）では「クロステル巷の界限は、アイデンティティを回復するやすらぎの場としての意味」がすでに指摘されている。

注5　宗像和重は、「森鷗外作「舞姫」――母の「諫死」をめぐっての再説――」（『国語教室』六〇号、97・2　大修館書店）の中で、手紙の内容は「諫言と叱責ではなく、慈愛と祝福」であったと推測している。

注6　この点について、大屋幸世は「『舞姫』の一面」（『国文学』92・11　至文堂）の中で「余」の「〈弱性〉という性格」とアンビバレンツの関係にある「〈自負〉の念」を問題にしていて示唆的である。

注7　斎藤美奈子は『妊娠小説』（94・6　筑摩書房）の中で「舞姫」は「はじめて「男にとっての妊娠」という事態がありありと浮かびあがってくる」作品だとする大変興味深い指摘をしている。

注8　この点について田中実（前出）は、太田の「擬態化」「擬態的対応」を問題にして、さらに「空白的自己」を抱える太田を問題にしている。

＊本文引用は、『鷗外選集』（岩波書店）第一巻「舞姫」による。